

---

# 恋×罪

文月 彩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋×罪

### 【Z-マーク】

Z4383C

### 【作者名】

文月 彩

### 【あらすじ】

紗由実は最初の恋をした。たくさんの初めてをもらつた。でも、それは最後の恋だった。たくさんの悲しみももらつた。

最初で最後の最高の恋…。  
一度に体験してしまった。  
もう恋は出来ない。

私は小学校五年生の頃に、当時の担任と上手くいかずに反抗した。それが周りの父兄や親から「不良だ」とレッテルを貼られ、田舎の小さい町ではすぐに話は広まり、冷たい目線を送られる生活が続いた。

クラスメイトからも孤立していき、友達もいなかつた。

そして、よくあるストーリーだが、私は孤独と“誰も自分を理解してくれない”という寂しさから、荒れていった。

放課後には文通相手募集の記事で知り合った、隣町の同世代の子と夕方まで遊び、夜になると、十歳年上の従兄弟の家に遊びに行つた。親が煩かったから、私は従兄弟に勉強を教わっているということになつていた。

でも、実際は従兄弟の部屋は友達の溜まり場で、いつも従兄弟の先輩、後輩、友達でにぎやかで、私は社会人や大学生の人たちと一緒に、飲酒を覚えた。

さすがに煙草は煙が鼻について吸いたいとは思わなかつたけど。

私は、中学生になつてもそんな生活が続いた。

年齢が離れているせいで、なかなか溶け込めなかつた時期もあったが、さすがにその頃には仲の良い友達が3人できて、最初は私がまだ未成年だからと、夜のドライブとか休みの買い物とか、飲み会には誘つてもうえなかつたけど、徐々に一緒に行動するようになつていた。

仲間の一人、梨香は大学を卒業したばかりで、とても綺麗だった。色白で、細身で、軽くしているメイクがそれを引き出している感じで、私も将来は梨香みたいになりたいと思っていた。そして、もう一人、愁也は梨香の幼馴染で、私の従兄弟の彼氏だった。ちなみに梨香も愁也も同性愛者だった。二人はずっと一緒に、周りからはカップルだと思われていたみたいだけど、そのほうがお互い都合が良いから、構わないと言っていた。

そして最後に陵。陵は、従兄弟と同じ大学で仲良くなつた学友で、怒つたりするのなんか見たことなくて、飲み会とかでも気の利く彼は、みんなから好かれていた感じがした。

そしてすごいのは、三人ともそれぞれ大きな会社のお嬢様や御曹司だった。そういう話はみんな好まないので、私も詳しく聞いたことはなかつたけど、私なんかには信じられない話もちらほらあって、新鮮だつた。

本当に楽しかつた。

つまらない学校も、四六時中、三人の誰かとメールでやり取りしていたので、すぐに終わつた。

そして、今まで以上に休みが楽しみでしそうがなかつた。

ある日、愁也と陵とドライブに行つた。

星空が好きだと言う二人は景色の良い所を教えてくれると言つて、連れてきてくれたのだ。

最高の世界だつた。私は言葉もだせないまま星空を見上げていた。フツと氣づくと愁也が車に戻つていて、陵が私のすぐ近くにいた。そして「今度は、一人で来ないか?」そう言つた。

私はビックリした。私たちつて、良く集まつてバカ話してたけど、皆のことは大好きだけど、そういう感じになつた人つていなかつたから。

でも、私は皆に信頼されてて、気が利いて、私が学校であつた嫌な

ことなんかをメールすると、親身になって話を聞いてくれる陵に、友達以上の感情があつた。でも、顔も悪くなくて、その性格じや、す「ぐもてるんだろうな…。と思つていたから、本気じやないのかな。とか、色々考えた。でも、この人になら騙されてもいいか。と開き直り「うん。」つて答えた。陵は、私のことを強く抱きしめ「僕が紗由実のこと守る。」そう言つてくれた。

その日から、陵の隣は私のポジションになつた。

飲み会でもずっと隣。

ドライブに行く時も、いつも運転役の陵を今まで後部席から見てたけど、助席に昇進した。

愁也以外は私たちが付き合つているのを知らないはずだったのに、スグに皆にばれた。

何回か皆と今まで通り遊んでる中で、手をつないだりはしたけど、それ以上はしばらくなかつた。

そして、告白から1ヶ月後くらいに初めてデートに行つた。

なんか、一人つきりつて初めてで、すごく緊張して、車に乗つた時から一言も発せられなかつた。

でも、陵は普通に話しかけてきたし、ちょっと尊敬した。男の人つて、そんなものなかとも思つた。

二人で映画を見た。見たのは恋愛ものだけど、私はすぐ涙もろいから、号泣していた。

男の人の前で泣くの初めてで、恥ずかしくて、アクションものとか選べばよかつたつて、けつこう後悔した。

よくあるパターンだけど、二人はずつと手をつないでいた。

薄暗い映画館をでると、陵は私の鼻が真っ赤だつて言つて、笑つた。

私はやつと緊張がほぐれて、ちょっと怒つた。

そしたら、「良かった。なんか今日いつものマシンガントークが封印されちゃつてるから、もしかして嫌々だつたのかなって思つて、

す「ご」あせつたけど、やつぱり紗由実だね「つてす」ご」い悩殺系の笑みを浮かべた。

私は改めて陵が好きだと思つた。

でも、恥ずかしかつたから、「じうせ、鼻の赤い私なんか、ピエロみたいで可愛くないもん! もう陵ちゃんの馬鹿チン!」つて言つた。そしたら、私の頭を持つて、顔を上に持ち上げた。これはキス! ? と思い、ハツと目をつぶつたら、思いのほか、されたのは鼻だつた。そして「可愛いよ」つて言つた。私はそれからしばらく鼻が熱くてしかたなかつた。

その後、ファミレスでランチして、車に戻ると、車内はすゞく暑くなつていて、クラクラした。

そこで陵は「どこか涼もつか?」つて聞いてきたから、私は普通に「うん」と言つた。

お子ちゃんの私はその言葉の意味に全然気づかなかつたけど、着いたのはラブホだつた。

でも、私は陵のことが好きで、別に構わないと思つた。だけど、まだ陵に話していいことがあつた。

部屋に行つて怖い顔をしている私をぎゅっと抱きしめて「何か言いたいことがある? 今なら聞くよ」と言つた。

私は言つた。「陵ちゃん「ゴメン! 私、後悔してる。私、処女じゃない。」すると、陵ちゃんは、すかさず言つた。「そんなの気にしないよ。僕たちまだ始まって1ヶ月だ。だからお互いに、それ以前の過去があつて当然だ」そう言つて、私たちは深い深い、そして長いキスをした。何も考えられなくなつて、気がついたら私は陵の腕に支えられて立つている状態だつた。

恥ずかしくて、目が潤んだ。

初めてのキスは陵の吸う煙草の味だつた。大嫌いだつた煙草のにおいも、大好きな陵の香りになつた。

シャワーは別に浴びさせてつてお願いした。そして、私が先に浴

びることにした。

一応、デートだったから、準備はしてたけど、急展開に頭がついていかなかつた。

ほてつた顔をクールダウンすることしか考えてなくて、頭から思いつきリシャワーを浴びてから後悔した。私のロングヘアは乾かすのが一苦労だ。

シャワーから出ると「遅いから、お風呂でのびちやつたかと思つた」って、陵は笑つてた。

私はそんなに長い時間シャワーを浴びていたのかと思った。お風呂になんか入つていないので…。自分でいりうつ時は、意外と乙女なんだと実感した。

そして、陵がシャワーから出でてくるまでに急いで髪を乾かして、テレビをつけてみた。

そしたら、普通にアダルトチャンネルがついて、慌てて消そうと思つたらスイッチが見つからなくなつて…。そこに、陵が出てきた。必死に消そうとしてる私に「そんなに興味があるなら、つけたまでもいいよ。」って、不敵な笑みを浮かべていた。でも、結局消してくれた。

「私たちは始め、何をするでもなく布団をかぶつてた。

私は恥ずかしくて、丸くなつて陵の胸に埋もれた。心臓の音が頭にまで響いた。

しばらく経つて、「さつきより顔が赤いよ?」って、私が言つたら「全部見せて。」って言われた。

陵は、私が顔を上げるまで待つてくれた。

顔を上げたら、すごく長いキスをされた。

気がついたらバスローブが脱げてて、キスは全身に及んでいた。自分の体が信じられなかつた。

首とか耳、足、普段なんか、どうでもない部分が熱い。吐息が漏れた。

陵は優しく私を舌で転がした。私は始めての感覚に悶えた。「死んじゃう。」そう叫んだ。

体中が痙攣して、陵にしがみついた。

陵は一つ一つ私の表情を見ながら、動いているのが分かった。

私は、眠くもないのに意識が遠のきそうになった。

陵が果てたときには、私は何を言つてるか分からなくなつてた。

そして、猛烈に眠気が襲い「ゴメン。もう眠い。」そう言つて、寝てしまつた。

どのくらい寝てたのか、目を覚ますと陵は「ありがとう。」「そう言つて、軽いキスをしてきた。

何があるがとうなのかと思つて、「ん？」と聞く私に、「本当は紗由実がせめて高校生になるまでは告白しないでおこつと思つたんだけど、飲み会でもいつも無防備な格好してるし、誰にでも隙を見せるから、心配で仕方なかつた。そのうちに学校で同級生の彼氏が出来たとか言われたら、ショックだし。それで、愁也に相談したら、気持ちを伝えるのに年齢や性別は関係ない。つて言つて、思い切つて告白したんだけど、まさか紗由実も僕のこと思つてくれてるとは思わなかつたから。」そう言つた。

私は確かに告白をOKしたし、陵のことは好きだけど、いつ陵本人に好きなんて言つたんだろう?と思つて、「うん…。でも、我まだ好きつて言つてなくない?」と言つたら、「やつぱりね。Hの最中に僕が好きだつて言つたら“私も”つて言つてたし、寝てる時に僕のこと好き?つて聞いたら“大好き”つて言つたから、気持ちを知ることは出来たんだけど、ひょつとして覚えてないんじゃないかと思つたんだ」つて笑つてた。

顔が真つ赤になつていいくのが自分で分かつた。そして、また陵の胸に埋もれた。

そしたら、今度は眞面目な声色で「ところで僕さあ、結構、紗由実の情報は色々聞いているんだけど、初Hの相手はだれ?」つて、

言われた。

私は困った。

彼氏なんて陵が初めてだ。でも…。悩んでいると「紗由実が僕を信用できたら話してくれればいいよ」と言ってくれた。

私はそう陵が言い終わると同時に「話し始めた。

「違うの。陵の事は信用してる。でも、怖かった。自分でも消してしまいたい。私がむっちゃ荒れてたの知つてたでしょ？その頃は、死にたくなるほど自分がどうでも良くて、ダメだつて言われることをどんどんしたくて、できるだけ反抗したかった。早く大人になりたいとも…。そして、そういう行為に調度、興味が出てきた頃だつた。そこに、前に引っ越した泰雄って大学生いたでしょ。そいつに誘われたの。もっと大人に近づくにはHしなきやつて言われて…。んで、たまたま従兄弟の部屋で一人になつたときに…。でも、キスもしなかつたし、急にいれてきて、痛くて、生でやられて、気がついたらお腹の上にアイツの…」

陵は私を強く抱きしめた。そして「そんなのHでもなんでもない！そんなの忘れる！いいか、Hって言つるのは今日、お前とオレがした行為だ。お前は今日始めてHしたんだ。」そう言つた。

私は泣いていた。初めてだつた。涙がすゝつとこぼれた様に頬を撫でていつた。

陵は私に色々な感覚を教えてくれた。

そうして、私たちのデートは回数を重ね、私は陵に開発されていった。

そこで私は、ずっと疑問に思つていたことを聞くことにした。「ねえ、陵ちゃんつて何人くらい経験あるの？？すゞくこうの手馴れてるよね…？」と。

すると、ちょっと気まずそうに、「

「気になる？あんまり人に言えた話じゃないんだけど、中学受験から家庭教師を親が頼んでてね。大学生の女性だつた。中学三年くらいになると、僕はその女性に好意を持つようになつた。そして、高校に合格したら付き合つてくださいつて、告白したんだ。でも、その答えは意外なもので、先生には彼氏がいる。でも、体の関係を持つている男性が他に一人ほどいるんだつて。それで、愛してるのは彼氏だけど、彼氏とはHのほうは上手くいつてなくて、すごく欲求不満を感じてるつて。だから、陵君が高校に受かつたらHしましょうつて。僕も男だからね。目の前の自分好みの女性に、欲求不満だからHしましょう。そう言われて断ることはできなかつたよ。そして、高校生になり僕と彼女は、一般的に言うセフフレつて言う関係になつたんだ。でも、僕は初めてだし、なにより彼女は主導権を握つてHするタイプだつた。でも、高校を卒業する頃には僕もそれなりに経験が増えたし、自分なりに自信がついてきて、逆に彼女の主導権を握つてやりたいつて思い始めたんだ。そして、良く彼女を觀察し始めると、僕は意外と冷静だつた。ああこうすれば良いんだ。とか、反応を見て行動する余裕が出来た。そして、今に至るつて感じかな。彼女とは大学に行くのに地元を離れるときにそのまま終わつたよ。だから、普通の同級生よりは…。って感じ。」

そう言つて、遠くを見ていた。

なんか、陵が哀しそうな目をしたように見えたから、「変な事聞いてゴメンネ。でも、陵が好きだから、何でも知りたいの。そんなことで嫌いになつたりしない。」そう言つたら、続けて陵は話し始めた。

「前にもね、やつぱり同じような質問されて、その話をしたら、愛のないHができる男は絶対に浮気する。セフレがいた男なんて信用できない。そういわれてふられて。でも、僕は少なくともそのときその時、好きじゃない人を抱いたことはない。思いは届かなかつた

し、それでもそういう関係を引きづつた僕が悪いのは分かってるけど、僕はずっと彼女が好きだつたんだ…。でも、そう言われて始めて、自分は非道徳なことをしてしまつたんだつて、気づかされた。僕はずっと女の子から“セフレのいた男。” そう思われるんだつてね。だから、それ以来彼女つていなかつた。こういう話をするのが怖いし、でも上手く誤魔化せるほど僕は大人じゃないから。「

始めて私は陵の弱い面を見た。

でも私は、そんなトラウマになつてゐる話を自分にしてくれたつていうことが嬉しかつた。

陵と付き合い始めて、数は減つたけど、愁也や梨香とも遊んだ。でも、ある日梨香のアパートに遊びに行つて、手料理をご馳走になつた後、急に向かいに腰をかけた梨香が、私にキスをした。これにはひどく驚いた。

そして梨香は「私は同性愛者だけど、紗由実をそういう目で見たことはなかつた。でも、やつぱり美味しそうに」ご飯吃べてる紗由実を見たら急に可愛く見えちゃつて…。ダメかな? 愁也と紗由実の従兄弟だつて付き合つてるけど、紗由実の従兄弟は彼女だつているじやん! 私も、紗由実と陵が付き合つても構わないから。」 そういうつて、押し倒された。

スポーツをしてるせいか、梨香は意外に力があつて、スカートに手を入れられて太ももを触られた。でも、私はつい弱い部分を触られて、体が反応してしまつた。

その反応を梨香は見逃さなかつた。続けて首にキスされた。でも、スグに梨香は離れた。

そして「やつぱり陵には適わないや! 前に酔つ払つた時にふざけて触つたときには、ここだつてここだつて何ともなかつたのに…。紗由実さあ、陵に大事にされてんだね。」 そう言つた。

私は恥ずかしいような、何ともいえない気持ちになつた。

そして、「気持ち悪いでしょ？愁也でも迎えに寄越すよ。一人で車乗るのいやでしょから。」そう梨香が言つたから、私はこんなことで梨香との仲に亀裂が入つては…。と思い、「ううん。梨香が送つてよ！全然構わないよ。確かに驚いたけど、嫌いにはならない。だつて、途中で辞めてくれたじゃん。梨香とは意味が違うかもだけど、私だって梨香のこと大スキだよ。」そう言つた。

梨香は振られた相手にそんなこと言われたの初めてで、むしろ今までその相手には避けられ続けたつて言つて、ちょっとびり目が潤んでた。

それ以来も、私たちの仲は変わらなかつた。

彼女にはそれから少し経つて、可愛い彼女が出来た。

なんとなく、言いにくかつたから、その時には陵には話さなかつた。

そして、その次の日、愁也に遊びに誘われた。

足のない私は、従兄弟と一緒に愁也の家に行くことになつたんだけど、立派なマンションで、一人で住むのにはもつたないくらいだつた。キッチンとトイレ、お風呂、玄関…。それぞれが別々で、その他に部屋が二つあつて、一つをリビングに、一つをプライベートルームにしてるみたいで、私と従兄弟は近くのスーパーで食材を買い込んで行つて、料理の得意な愁也に、パスタを作つてもらつた。愁也は従兄弟のことをゆうつて呼んでて、普段は皆、祐治くんつて呼んでるから、ちょっと新鮮だつた。ご飯を食べて、一緒にソファーに腰掛けながら、色々話してて、私が梨香に襲われた話も、梨香本人から聞いたらしくて、半分笑い話になりつつも、愁也が話し始めたけど、同じ同性愛者の愁也を目の前に、私は何て受け答えしたらいいのかすごく困つた。そして、微妙に会話が途切ってきたから、私はお部屋を探検してくるつて言つて、リビングを出て、ジャグジー・バスとか、男の一人暮らしとは思えない、使われてる感じなのに、

綺麗なキッチングを見た。最後にプライベートルームへ行つた。そこにはワークデスクと、DVDプロジェクター、ベッドがあつて、シンプルだつた。そして、始めて見るプロジェクターに興奮して、棚に整頓されているDVDから、面白そうなディズニー映画を一本とつて、かけた。

少しの時間が経つて、明らかにDVDとは違う声が聞こえた。なんだろう？と思つて、隣のリビングに行こうと思つたら、なんと、すりガラス製のドア越しに、ソファーアの上で一人が抱き合つシルエットが見えたので、ちょっととバツクした。すると、中から従兄弟が「馬鹿か！紗由実が隣にいるんだろ！！！」って言つて、抵抗したらしい声が聞こえた。でも、愁也は離れることがなく従兄弟に乗つかつたままだつたから、慌ててプライベートルームに戻つた。一体何を考へているんだ。私がいるのにHをし始めた？？私はちょっとびり混乱した。でも、すりガラス越しにシルエットがちょっと見えただけだし、キスで終わつてゐるかも。とか思つて、一応壁に耳を当ててみた。そしたら、二人は始まつていた。ビックリだ。従兄弟が受け身だつたことにもビックリだけど、イタヅラ好きの愁也のことだから、きっと私と従兄弟の反応を楽しんでるんだ！と思つた。私はDVDなんか頭になくて、壁から離れられなくなつた。一人の関係は知つてたし、大体の想像はついていたからか、気持ち悪いとか、そういう感覚はなかつたけど、しばらくたつて、やっぱりこれはいけない。と思って、大人しくDVDを見始めた。

さつきまで自分が耳をつけていた白い壁一面にプロジェクターが映し出す映像をぼ～つと見ながらベッドに横になり、ちょうど陵がお昼休みの頃だらうと思つて、電話した。そして、けつこう頭がいっぱい、前日に梨香に襲われた話から、今の状況まで一気に話した。そして、昼休みが終わつちゃうから、とりあえず今は大人しく終わるのを待つていて、仕事終わつたら愁也の家に行くから、待つてて

と言われた。そうしている間に一人の情事は終わつたらしく、愁也が部屋に来た。私はすかさず、「信じられない！隣で何やつてたの！？」って言つたけど、愁也は悪びれる様子もなく「ごめんごめん！ついね。ゆうはお風呂入つたからリビング戻つておいで。」そう言われた。そしたらお風呂場から従兄弟が「お～い愁也！～オレの服どこだ？」って叫んでいるのが聞こえた。愁也は私といるリビングから「洗濯機の中だよ～！汚れちゃたから洗つた。乾燥までして、あと三時間くらいかかるから、俺の服着てろ！棚の上にあるだろ」って言つた。もう、呆れて何も口に出なかつた。そして、愁也に「聞いてたの！？」って聞かれて、私は正直に「途中までね。でも、途中で、陵が昼休みの時間になつたから、電話してたから」って言つた。そしたら私が陵に話したのを知つてか知らずか「げつ！陵怖いんだよなあ。紗由実に關することには…。梨香のことだつて、才しなら事前にとめられただろつて、言われるはずだし…。もう、陵が迎え来る前にオレも紗由実のこと襲つちゃうぞ！！」って、意地悪つぽく言うから、私も意地悪つぽく「できるん！？」って言つて返した。私たちはとても仲良しだ。だから、こんな状況でも、結局は笑つて終わりになつた。

もちろん、陵が私を迎えて、愁也にお説教をたれたことは言つまでもないけど、陵も愁也の性格は知つてゐるから、最後は「それで、紗由実に聞かれてると思って、大興奮ですか？」とか言つて、呆れつつも三人で笑つてた。

こんなやり取りも。きっと同級生同士ではありえない素敵な時間なんだ。たまに、仕事の話とか、大人の会話にはぐれて、聞いてることしか出来なくて、ちょっとびり寂しいけど、それでも、私はこつち側にいたいと思つた。帰り際に愁也が私に「今度はラブホ付き合つて！男二人じゃないトコあるんだよ。」そう耳打ちした。私はまた陵に怒られるよ。と思いつつ、面白そだだから「OK！」つて答えた。

帰りの車で陵が「紗由実は隙がありすぎだつて、いつも言つてゐるだろ！その、信頼しきつてゐるつていう田線で見られるのつて、見られる方からすれば、すごく快感なんだよ。変に誤解されても何も言えないよ」そう、諭すように言つた。私は「そんなつもりないもん…。大体、信用してる人自体が陵と梨香と愁也しかいないし…」と、つぶやいてみたそしたら、陵が私の肩を抱き「分かつてゐる。そういう紗由実が、愁也も梨香も僕もすごく好きだよ。でも、そういう話を聞くと、やつぱり心配だから。あと、愁也と祐治君が一緒に出かけるときには、一緒に行かないほうがいいんじゃないかな？特にラブホはね！男同士じや入れないだろ？でも、紗由実がいれば入れるから、つき合わされるよ。」そう言つて、私の目を見た。私はビックリした。愁也との会話が筒抜けだつたのかな…？と、何も言わない私を横目にまた陵は「大体予想はつくんだよ。」そう笑つた。陵つて、意外と切れ者なんだと思った。そういえば愁也も怖いつて言つてたしなあ。なんて思つてたら、家の近くに着いた。私たちはいつも家の近くでお別れだつた。親にばれたりしたら大変だから。そして、お別れのキスをして車を降りる。キスはいつも陵からだつた。でも、ここ一日は色々あつたせいか、私も離れたくなくて、一度陵からされた後、今度は私から一度して、車を降りた。

降りてから私は耳が、顔が赤くなつたのが分かつた。そして、すぐについでから私は耳が、顔が赤くなつたのが分かつた。そして、すくに次いつ会える？？つてメールした。陵は会社の役員だから、あんまりまめには会えなかつた。なんでも、祖父が建てた会社で、現在祖父は、会長つて役職だけ就いてるけど、事実上は引退してて、お父さんが社長であり、実権を握つてて、陵も行く行くは社長を継ぐことになるらしいけど、今は一通り全部の部署を2年ずつ経験して、専務になつて、お父さんの部署に入るんだつて言つてた。でも、お父さんはとても厳しい人で、相手にNOとは言わせない人で、陵も逆らえないつて言つてた。前に、陵はお父さんのこと苦手？つて

聞いたことがあるけど、陵は、むしろ苦手って言うほど話したことないって言つてた。うーん…やっぱり凡人には分からぬ世界かもつて思つた。だから、ただですら土日しか会えないし、私が親に怒られちゃうから、日帰りしなきやいけないし、お泊りとか出来ないのに、下手すれば一週間とか会えない…寂しくて、わがまま言つちゃいそうだから、あえて次の約束はメールですることにしていた。でも多分、陵がお願いするんだろうけど、会えない週は土日のどちらかは愁也や梨香が遊びに誘つてくれた。だから、私も陵が私と会う約束の日に急に仕事で後輩がトラブル起こしたって言えば、行って来てあげなつて心から言えたし、どうしても今月中に終わらせたい仕事があるつて言えれば、そつちを優先してもらつた。

陵が、会社のことをいつも考えてて、仕事が好きつて言つのは、話しの随所から分かつてたし、デート中つまり土日にも、携帯が鳴つて、後輩から仕事の相談を受けたりしてて、きっと職場でも頼りにされてるんだろうつて思うと、自分のことじやないのに嬉しくなつた。やっぱり私のダーリンは最高！なんて、肩に抱きついて電話が切れるまで待つた。そして、しばらく会えなかつた後の久々のデートは、私にとつてサプライズだつた。レストランに予約入れててくれて、ランチした後に、大好きな映画に連れてつてくれたりして、最後は最高の夜景を見せててくれて、甘いひと時を過ごす。私は愁也と陵に連れてつてもらつて以来、その景色から見る星空がたまらなく好きになつた。星座も分からぬのに、星が大好きになつた。いつか私が「星はすごく気持ちが安らぐから好き。陵ちゃんと同じくらい好きかも。」そう言つたら、陵は「僕は月派かな。だつて、紗由実つて一緒に買い物行つて、トイレから待ち合わせ場所に戻れなくなつちゃうくらい方向音痴でしょ。でも、月なら紗由実でも迷わず見つけられるから、僕は月になりたい。いつも迷わずに紗由実が俺の元に来られるように。」そう言つた。思わず陵の胸に飛び込んで、その後は月に釘づけになつた。その日から、月でさえも私の特

別になつた。その日はちょうど満月で、私は満月を見るたびに陵に会いたくなつた。後で愁也に話したら、二人ともロマンチスト？つて笑われたけど、実際、そうなかなつて思つちゃつた。今までなら、気持ち悪い！とか言ってそつなのに、全然そういう気がしなかつた。

陵とはボーリング、カラオケ、ゲーセン、映画、遊園地、動物園・色々な所に行つたし、愁也や梨香も一緒にバー・ベキューしたり、花火大会行つたりもした。でも、私は陵の家へ行つたことがなかつた。行つてはみたかつたけど、陵から誘われない以上、何か理由があるのかなつて思つて、ずっと言わなかつた。でも、どこに出かけのも飽きてきて、デートで少しはドライブしたながら、この後どうする？つて状況になつた時に、陵が「家来る？最近は愁也くらいしか入つたことないんだけど。」って言つから、もちろん行くことにした。そしたら、愁也ほどの大きさじやないんだけど、立派なマンションだつたでも、どの部屋にも表札がなくて、「皆空き部屋なの？」と聞いたら、「実はこの階に全部で4部屋あるんだけど、住んでるのは僕だけなの。父が僕が女でも連れ込んで、変な噂が立つのが嫌だつて、貸し切つたんだ。だから、そもそもこの階でエレベーターから降りるの自体が僕だけ。でも、一人でそんなにたくさんの中屋を使うことがないから、一部屋しか使つてないんだけど、前に大学の友達を連れて来たら、その話しが広まつて、使つてないなら隣の部屋を貸してくれとか色々言われて、大変な思いしてから、愁也しか連れてきてない。あいつもすごい立派なマンションに住んでるから“どんな家の息子だ”って詮索されるの嫌で、友達を家には呼ばないから、仲間つちやあ仲間だからね。それに、父の思う通りになるのが嫌で、女人を連れこんだこともないんだ。でも、紗由実なら何言われてもいいやつて思つたから。」そう言つた。やつぱり陵の家つてすごいお金持ちなんだ。マンション一階が貸切なんて、テレビの世界だと思つてたけど、意外にも自分の彼氏の話だつたこ

とに驚愕した。でも、そんな陵の家の一角に踏み込めた気がして、嬉しかった。

部屋の中はとてもシンプルで、陵らしいと思つた。棚とかそういうのは全部メタルラックで統一されてて、広めのリビングにあるのはテレビとソファーと小さなテーブルだけだった。そこで、私は借りてきたDVDを見た。見終わつてお腹が空いたから、ピザの宅配を頼んで、食べた。そしたら、お腹がいっぱいになつたせいで急に眠くなつて来て、陵の腕の中で、膝に座つたまま寝てしまつた。目を覚ますと、まだその体勢のままで、陵が私を膝に乗せたままで、私の頭にこぼさない様にと、体を不自然にひねりながら、頑張つてピザの残りを食べていた。私は起きてすぐだつて言つのに、爆笑した。ほんの十五分くらいの話しからつて言つてたけど、「下ろして食べればよかつたのに。」つて聞くから、初めて一緒にお風呂に入ることにした。お湯を張つて来るから待つてつて言つて、陵はお風呂場に行つた。いつも何でも準備してくれるのは陵だったから、普段はそのまま待つてるんだけど、私は少し経つてから、そういうばこには女の子らしく手伝つたほうがいいのでは?と思い、かなり遅れて立ち上がつた。そして、お風呂場に行つたらビックリ。泡ブクブクだった。私はこういうのに憧れていたので、服のまま飛び込みたいと思うほど、喜んだ。陵はそんな私を見て、「前にラブホでライトがピカピカのお風呂見て喜んでたから、こういうのも好きかなと思つて。」そう言つた。陵は本当に私のつぼを完璧に押さえてるのだと感心した。

お風呂は最高だつた。泡で遊んだり、背中を流してあげたりした。お風呂でそのままエもした。その後、服を着ないで、タオルだけ巻いてお風呂を出て、プライベートルームへ移動した。そこは愁也の部屋と同じで、ワークデスクとベッドがあるだけだった。私たちは

ベッドでHを再開した。お風呂で既に何回か果てていた私は、ベッドでの情事中に快感に耐え切れず、意識がなくなつた。目を覚ますと、普通に布団をかぶつて寝てた。陵は隣で起きていて、私の頭を撫で、髪の毛を触つてた。私は髪の毛を他人に触られるのがくすぐつたくて苦手だつたけど、陵に触られるとくすぐつたいてわけじやなく、体中が熱くなつた。私は途中で意識がなくなつてしまつたことを詫びて、初めて陵に自分から奉仕した。それからは、クリスマス、陵の誕生日なんかはしてあげることにした。私から陵への精一杯の気持ちの表れだつた。

その日以来、私たちは毎回一緒にお風呂に入ることにした。一人で買い物に行つたときに、色々なお風呂グッズを買いあさつて、子供みたいに遊んだ。お風呂クレヨンっていう石鹼で出来たクレヨンを買つたときには、壁にハート書いたり、相合傘を書いたり、小学生みたいなことをして、喜んでいた。お風呂はどんなに汚しても平気なので、ローションって言うぬるぬるした液体を使ってHしたりした。何をしていても楽しかつた。あまり子供の頃に友達と遊ぶつてことがなかつた陵はすごく樂しいつて言つてた。その笑顔が大好きで、離れたくないと思つた。

それからも、ずつとずつと喧嘩もなく私たちはラブラブだつた。むしろ、私が何かで怒つても、陵が笑つて「じゃあ、こうしよ！」なんて、譲つてくれるから、喧嘩にもならなかつた。そんな幸せ絶頂の日々は私が高校一年生になるまで続いた。

春のある日、デートで花見に行つた公園で陵が神妙な顔つきで「大事な話がある。」つて、言つたまま歩き出した。私はいつもと様子が違う陵に違和感を覚え、黙つて着いて行つた。陵は少し小高い所にある、周りに人のいないベンチに腰をかけたので、私も隣に座つた。いつもなら腕を組んだり、ひざに座つたりするんだけど、そ

の口はそういう雰囲気ではないと思つた。少しの沈黙の中、陵はゆつくりと話し始めた。

「紗由実には心配かけたくないって思つてずっと言わなかつたんだけど、いや、僕自身もそんな話を真に受けてはいなかつたんだけど、僕には親が決めた婚約者がいるんだ」

「。私は返事もすることなくただ陵を見つめた。なんとなく想像はしていた。

梨香と愁也も婚約者だつて、前に一人から聞いていたから。私は信じられないけど、彼らは子供のうちに、親同士が婚約を決めるのだと。私は梨香に「何で嫌だつて言わないの？おかしいよ。今時そんな親が決めた相手と結婚だなんて、戦国時代とかじゃないんだから。」そう言つた事がある。そしたら梨香は、「もともと私と愁也は遠い親類で、私の祖父の前の代くらいは一つの会社を共同経営していた仲らしいの。それが祖父の代で枝分かれして、別々になつた。だから、同じ年に生まれた二人を行く行くは結婚させて、そのついでに二つの会社を元のように合併して、大きくしたいつて、お互いの親が考えていたんだよ。だから、生まれた時から決まつていたようなものだから。」そう、普通に答えた。私には全く理解できなかつたけど、愁也も同じようなこと言つてて、「梨香の話に付け加えるとしたら、俺らの母ちゃんたちもそんなんで、大きな取引先の家だからとうちに嫁継いできた。そんなふうに、代々会社の為に子供利用したり、犠牲にしてきているのに、自分たちの代で私欲で終わらせるのは出来ないな。」つて。私は益々理解が出来なくて、「だったら、別に今のままだつて合併したらいいじゃん？」つて言つた。そしたら愁也がまた、「それはどちらかの会社にとつてマイナスになるんだ。合併した後、どちらの社長がその会社の社長になるのかとか、色々な取り決めを行う際に、どちらが決定権を持つか

と…。そして、社長にならなかつた方の、社長は“相手の会社に吸収された”とか“会社を乗つ取られた”と言われる。それを恐れるんだ。でも、一つの会社の社長がたまたま男女で、結婚して、合併したつてことなら、変に思われることなく、めでたい！で話しが済み、決定権は男であるオレが持つても、何も言われないからね。”と答えた。

私は陵の話を聞いて、そんなやり取りを思い出した。

そして、ゆっくりと口を開き「それって愁也たちと同じ！？」そう呴いた。陵は一瞬驚いたような表情をしたけど、すぐに真顔になつて、

「そんな感じ。聞いていたんだ。驚いたよ…一人がその話したの俺と祐治君にだけだと思っていたから。ただ一人と違うのは、僕の婚約者には兄がいて、会社はその人が継ぐから、合併はしない。ただ、とても大きな取引会社で、父はその娘と僕を結婚させて、自分の会社の安泰を願つているんだ。そして、先方も乗り気でその話が決まつた後には、自分たちの会社があり続ける限り、御社との契約をし続けよう。とね…それで、僕は中学生の頃に“お前には婚約者がいる”そう父に言われたけど、まともには聞いてなかつたし、そんな会つた事もない人と結婚なんてするわけがない。そう思つてた。なにより、昨日父にその話をされるまで、忘れてた。それで、その話しの内容なんだけど、僕たちももう、結婚適齢期だから、秋に婚約を正式に双方の会社で発表するから、それまでに身辺の整理をしておけ。そういう内容だったんだ。僕はもちろん反論したよ。そんな急に言われて、ハイそうですかって言える訳がないだろ。そしたら、父は僕を脅してきた。“婚約を解消したら、取引を切られる。それがこの会社にとつて、どれだけ痛い損害か分かるだろ？それに、そんな奴は勘当だ。お前は何不自由ない生活をしてきた。それ

が、身一つで社会に出て、耐えられるわけがないから、馬鹿なことは考えないことだな”って…。でも、今のような生活は出来ないけど、それでも、こんな年上の僕でよかつたら、一緒に家を出ないか？会社も家も捨てる。一緒にやろう。”って…。

私は泣いていた。どうしたらしいのか、何を言つたらいいのか分からなかつた。

私の答えは、考えなくてもスグだ。陵と一緒にいたい。でも、私がいなれば…。でも、そんなのできっこない。でも…。でも…。“でも”という言葉が頭をいっぱいにした。

お互に無言の状態が続いた。でも、陵は私の答えを待つてると感じた。だけど、やっぱりそんなに簡単に答えが出せることじやないつていうのは、私にだつて分かつた。その答えが、陵という一人の人生を変えてしまうのだから。

私は考えた結果「夏までには返事するから、この話しさは保留にしない！」そう言つた。その日から、心につつかえたものがあつて、夜も寝つきが悪くなつて、学校行つても何もする気が起きなくて、急に気持ち悪くなつて早退したりが続いた。

ある日、元気がないのを心配した、愁也と梨香にドライブに連れてもらつて、そこで私は洗いざらい話して、出ない結果に心のもやが晴れないつて、涙した。愁也はティッシュを黙つて出してくれて、梨香は肩を抱いてくれた。すごく救われた気持ちがした。そして梨香が「私たちは、そんなに結婚つていうのを深く考えたことないから、紗由実のその葛藤がわからない。でも、一人が共に幸せになれない結果なら、私は自分の幸せを優先するな。」そう言つた。私は梨香らしいと思いつつ、変に“その気持ち分かるよ”なんて同情されなくて良かつたと思つた。「ありがとう」そう言つて、覚悟を決

めた。

愁也たちに会つた次の週、陵とデートをした。

その日は、一日ドライブをした。別にこの間の話なんか、なかつたんじゃないかと思うくらい普通だつた。そこで何かの拍子に、お互の夢について語り合つた。私は「大きくなくていいから、二階建ての一軒家を建てて、優しい旦那さんと、可愛い子供に囲まれて暮らすこと。ああ、家には大きなわんちゃんが庭を走り回つて」なんて言つた。本気だつたのに、陵は爆笑してた。そして、やつと笑いが収まつた頃に「僕は、早く会社をついて、そしたら結婚して家庭を持つ。会社は規模を大きくとかそんなのいらないから、従業員と俺ら役員、みんなが一つになつて、大きな企画を完成させたいんだ。そして、子供には将来なりたいものになつて欲しいんだ。僕は別に次の社長は自分の子供じゃなくたつて構わないんだ。会社を大切に思つてくれる社員に明け渡したつて構わない。」そう言つた。これが夢つてことは、今は全然そんな状況じやないのか…。つて思つて、ちょっと反応に困つた。そして、少し間が空いて陵が再び「でも、これは昔の夢ね。今は、大好きな人が隣にいてくれれば、どんな未来でもいいつてそう思つ。」そう言つた。私は、一日忘れてた、例の話を思い出して、また泣いてしまつた。

また少しの沈黙があり、陵が「最近僕、紗由実のこと泣かせてばつかだね。僕が紗由実を守るつて言つたのに、『ごめんね』そう言つて、私の肩を抱いた。私は背中に陵の熱を感じ、口を開いた。

「私が泣く理由分かる？陵が好きだからだよ。いくら私が涙もろいからつて、好きでもない人の為にこんなに悲しくならない。そして、私が陵をこんなに好きなのは、陵が今まで私を大切に守つてきてくれたからだよ。」そう、半分叫ぶように行つた。私のせいで陵がこんな目に遭つてゐるのに、謝らないでと心の底からから思つたからだつた。

その日は、珍しく口をしなかつた。

そうして、私は結局、陵に答えを言いだすきっかけをつかめないまま、前に家に着いてしまった。

次の週もデーターした。やつぱり今までみたいな、何事もなかつたかのような雰囲気で、その日は陵の仕事の都合で夕方からだつたけど、一人でご飯を食べて、他愛のない話をして、星空を見に連れてつてもらつた。私は今度こそ答えを言おうと思った。言つならこそしかない。私たちの始まりの場所だから。でも、ここに来て、芝生の上に三角座りをして、星空を見ながら、言い出す機会を伺つていたところで、まだ少し冷え込む外気に私の体がブルつて震えたのを見て、陵が裏から抱きついて温めてくれた。こんなことされたら余計に話せないよ…。そう思った。こいつ、いつも私のことを見ててくれて、ちょっとした様子に気づいてくれる、そんなところがたまらなく好きなのだから。

この日も肝心なことは何も言えないまま、家に着いた。自分でも、こんなに自分が気が小さいことは夢にも思わなかつた。

あの、星空を見ても言い出せなかつたんだから、きっと普通に言い出すのは無理だ。そう思つて、違う方法を考えた。部屋にこもつて、何日か考えた。そこで耳に入つたのが、私の大好きな女性シンガーのある一曲だつた。

「（前略）未来を語る横顔 とても好きだつたから  
その夢守つていいくには私がいちゃいけなかつた  
(中略) この手を離さずに行けば どこまでも行ける気がした  
同じ道歩いていくと 繼うことなく信じた

どうしてそれなのに私は どうしてそれなのに私は  
だけど私は・・・（後略）

と言つものだつた。私は、まるで今の自分たちのようだ。と思い、  
また涙が出た。でも、『「これだ！』』と思つた。

次のデートは、カラオケにしようと思つた。でも、この時はひと月以上続いた体の不調と、初めて陵へ相談できないことが出来てしまつたというストレスで、思考回路がおかしくなつてしまつていた。

次のデートのとき、私は始めて自分から陵に「ラブホ行こう。」そう誘つた。その時は、ただ陵と離れたくないつて、一つになりたいつて、それしか考えられなかつた。でも、部屋に入ると私は、これから出す私自身の答えが怖くて、完璧におかしくなつていた。

部屋のドアを閉めると同時に「に、キスをした。長い長いキスを  
求めた。

そして、シャワーも浴びないで、ベッドに乗り「早く！」そう急か  
した。

陵もそれには驚いたようで「シャワーいいの？」つて聞いてきた。  
私は「いいの。」そう即答した。始めて自分から陵の上に乗つて、  
陵のシャツを脱がせた。陵は「おい！」つて言つて、私をひとまず  
離そうとしたけど、私は「今日は私の好きなようにやるんだから」  
そう言つて、続けた。私は、滅多にしないご奉仕を自分からした。  
陵も男だから、さすがにしばらく経つと準備万端だつた。私は、そ  
のモノに上から乗つかつて、飲み込んだ。でも、少し動いたところで、  
陵に突き飛ばされた。すぐに、逆に上から腕を押さえられた形  
になつた。そして、見たこともないような表情で「何するの？赤ち  
ゃん出来ちゃうよー？」そう怒鳴つた。私は負けずに「私に赤ちゃ  
ん出来たら困る？そうだよね。未来がないもんね」そう叫んだ。自

分でも最低な奴だと思った。そしたら、陵はさっきまでの怖い顔とはまた違った、不機嫌そうな、でも哀しそうな顔をしたまま、私は侵入してきた。私は暴れた。「やめて」そう叫んだ。そしたら、陵は「困るのは紗由実だ。」そう言つて、私を解放し、シャワーを浴びに行つた。私はベッドで泣きはらした。声を出して泣いた。始めて見た陵ちゃんの怒つた顔。私がした最低な行動。全てが私の頭の中でリーピートされた。私は今まで、人に本気で謝るつてことをしたことがなかつた。でも、今がその時だつて思つた。そして、慌ててベッドから下りた。本当に後悔していた。すぐ近くのドアへ行くのに足がもつれた。

シャワールームのドアを思い切り開けた私は「ごめんなさい！！」そう叫んだ。シャワーを浴びていた陵は、ビックリした顔で振り返り、私にすごい力で抱きつき「僕こそ『ゴメン。そこまで追い詰めたのは僕なのに、僕は最低なことをした。」そう言つて、声を枯らした。私も大号泣した。そして、強く抱きついてくる陵の肩に自分の手を回した。しばらくそのままだつた私たち。どれくらいの時間が経つただろうか。私たちは出しつぱなしのシャワーが頭上から降り注ぐのなんか気にもせずに、濃厚なキスをした。そして、ゆっくり、初めてのHを思い出すようなHをした。何回も何回もした。私が立てなくなつて、意識が遠のきそうになつたので、ベッドに戻つた。また何回かした。そして、私のベストポジションである、陵の胸の中に、丸くなつて寝た。

目を覚ますと、いつものように私の髪を撫でている陵がいた。幸せすぎて、またちょっぴり涙がでた。そして、私は最初で最後の「愛してる」という言葉を伝えた。陵は私のおでこに軽いキスをして、頭を抱いていた。

そして、その時が来た。私はラブホを出て車に乗ると、「カラオケ

に行きたい。」と言つた。

行きつけのカラオケ店の中、私は緊張に耐え切れずに、甘いアルコールが飲みたって言って頼んでもらつた。陵は運転なので、ウーロンだつた。そして、しばらくは普通にお互い歌つた。陵がある男性シンガーの曲を歌つたのがとても印象的だつた。その歌詞は私の心に歌いかけてきた。

「（前後略）ほんやりと見つめてる空を いくつもの風が運ぶ  
何もないことが 二人だけの幸せだつた」

私は、この曲の後にアノ曲を入れた。そして、前奏のときには陵に言った。「この曲が、今の私の答えであり、私の気持ち。良く聞いて。」そして、歌つた。途中で涙が出そうになつて、堪えた。なんとか最後まで歌いきつた。

陵は、私の手を握り「分かつた。自分には紗由実を幸せに出来る権利はないから、止められない…ありがとう。」そう言ついながらも、強く私の手を握つてきた。私はこのまま泣いてしまつては、自分の気持ちに嘘をつけずに“ずっと陵ちゃんと一緒にいたい”そう言つてしまつ。そう思つて、必死で我慢した。

その後、私たちは始めて、車内で一言も話さないまま、家に着いた。そして、始めて一人で出かけて、最後に別れのキスをしなかつた。そう、もう私たちは彼氏彼女ではない。そう思い、陵の車が見えなくなると同時に、泣き崩れた。

外が暗くなつて、近くの街灯が点いてもまだ、そこを離れられなかつた。親から怒りの電話が来たから、家のすぐ近くにいたのに、「友達と市内に遊びに行って、帰りの電車を逃しちやつた。そしたら、友達の親が迎えてくれて、夕ご飯をこ馳走になることになつたか

ら、遅くなるから。」 そう、嘘をついた。でも、どこかに移動する足もない私はどうしようもなくなつて、梨香に電話した。そして、「陵ちゃんを振っちゃつた」 そう言つて、また泣いた。梨香かは三十分くらいで来てくれた。梨香の家からうちまでは急いでも、四十分くらいかかるはずだつた。きっと、私のただならぬ様子に、かつ飛ばしてきてくれたんだと思つ。助かつた。私は泣きすぎてフランラしていた。

車に乗つても、泣いていて何も話さない私に梨香は「どうしたつて言つの？？ しかも、振つた！？ 意味が分からなによ。あんなに仲良いのに…。」 そう、痺れを切らしたつて感じで聞いてきた。だから、私は梨香にきちんと気持ちを説明するために、なんとか涙を堪えて、鼻水をふいた。そして、陵本人に話せなかつた気持ちを話した。

「私は、陵ちゃんと一緒に居たい。でも、それにはやつぱり陵ちゃんが家族と会社を捨てなきやいけない。私は陵ちゃんが会社を継ぐために頑張つてきた姿を見てるから、そんなことは出来ない。でも、陵ちゃんは私といる為に捨てるつて言つ。このままでは中途半端に二人とも良くない方向に進んでしまう。この際、大人しくお父さんの言つとおり結婚して、それでも私を囲つて欲しいとか、色々考えた。でも、どれも陵のためにも、もちろん私のためにも良くないことは明らかだし…。」

涙ぐんで私が話すと、いつも冷静な梨香が「だからつて、紗由実からー」 つて怒つた。

私は二の句を梨香が言い始める前に、付け加えた。

「相手が陵だから。普通は陵の立場なら、障害になる女が自分から身を引いてくれれば、迷わず会社とか、都合のいいほうを選ぶでしょ？ でも、陵は優しいからきつと私が、私のことは忘れて。つて言

つても、聞かないでしょ？ だつたら、一こつちから振るしか手はないつて…。しかもね、私最後に陵に最低な事したんだよ。陵に襲い掛かつて、赤ちゃん出来たら困るくせにって・・つて…。なのに、陵が泣いてた。」

梨香は今度は何も言わずに「そつかあ…もう紗由実は決めたんだね」そう言った。私が頷くと、「実は今、愁也の家に陵が来てて、大体の話は聞いたんだ。陵があんなに落ち込んでるの始めて見たし。それで、紗由実の気持ちしだいでは私と愁也で一人を復縁させようつて言つてたけど、そんな簡単な問題じゃないみたいだから。」そう言つて少しの沈黙が流れた後「もう大丈夫？ 誰かに話すとスッキリするでしょ？」そう言つて、綺麗な顔で微笑を浮かべていた。私は「うん」そう言つて、少し笑つてみた。まもなく家の近くに車は戻つて来た。そして、私は「ありがとう。」そう言つて梨香に軽く抱きつき、車を降りた。

家に帰り部屋に籠つた。独りでいると、陵のことしか考えられなかつた。

部屋には陵が誕生日に買つてくれたカーテンがかかつてて、一緒にゲーセンで獲つた熊のぬいぐるみがあつた。携帯を広げれば、二人のメールのやり取りが全て保存されていた。もうかかつて来ないであろう電話。その着信履歴まで消せなかつた。一週間が経つても、一ヶ月が経つても、私の頭の中は、気づくと陵との最後のHをしたラブホと、別れの場所に戻つた。私は陵のことを少しでも近くに感じたくて、陵と同じ銘柄の煙草を吸い始めた。

梨香や愁也から何通もメールが来てたけど、返事を返そつとするし、頭に陵の名前が出てきた。三人との思い出が蘇つた。一人との思い出には全て陵が出てくる。どうしても、返事が返せなくなつた。

私は、何かで気を紛らわせようと、しばらく連絡を取り合つてな

かつた飲み友達の数人に連絡を取つた。そのうちの一人と飲みに行く約束をした。最初は普通に飲みに行く予定だつたけど、飲んでいる途中でそいつにホテルに誘われたから、Hした。そしたら、Hしてる時には何も考えなくて済むつて事に気づいた。連絡を取つた数人の男、その全員と会つて寝た。

一人は私を好きになつたつて、告白してきた。こんな、荒れた私、ホントの私じゃないのに、好きなんて可笑しいし、彼氏なんて要らないから、断つた。

一人はセフレになろうつて言つて來たから、OKした。

一人は食事を割り勘しようつて言つてきて、私はそういうえば、陵ちやんと一緒に時は、一銭も出したことないな。つて、つい考えちゃつて、私に陵のことを思い出させたから、頭にきて、財布の中にある札を投げつけて帰つて來て、それまでだつた。

セフレとは普通にそいつの友達とかを呼んで一緒に遊んだりもした。まあ、最後は結局、そいつとラブホに行くことになるんだけど。でも、その友達の中に、私によく構つて來る男がいた。私は彼に告白された。嫌いなタイプじゃないし、何より「まだお互いよく知らないし、好きとかつて分からぬから、とりあえず付き合つてください」とつていう、告白に、それなら良いかあつて気になつた。私も“好き”つて言う気持ちが見えない状態だから。そして、彼と付き合い始め、セフレは辞めてつて言われて、辞めた。彼は四六時中、メールをまめにくれるタイプだつたから、寂しさも紛れて調度だつた。でも、ある日彼と初めてHをした後に、「好き。」つて言われた。私は「えつ？」つて言つた。彼は私が聞き取れなかつたのかと思つたらしくて、今度ははつきりと「好き。」そう言つた。私はこの後、彼に「別れよう。」そう言つた。

今私の、愛だとか好きだとかそういう感情はウザイだけだつた。

そうして、自分から全てを遠ざけた私はまた、独りになった。

そして、ある日夢に陵が出てきて、私の頭を撫で、その後に「汚くなつたな」そう吐き捨てる様に言つた夢を見て、飛び起きた。涙がこぼれた。そう、私は汚くなつた。何人もの男とHをして、私を思つてくれた人を簡単に裏切れるような、そんな奴になつた。今度こそ、陵を諦められる。今までは、どこかで、陵も私のことがまだ好きなんだつて、そう思つてたけど、こんな私を陵が思い続けていてくれるなんて、可能性は皆無に近い。そう思つた。それからの行動は早かつた。

アドレスも携番も消去。  
メールも着信歴も消去した。

そして、もう吹つ切れたんだつて、自分に言い聞かせるように、梨香と愁也に「心配かけてゴメンネ。もう大丈夫。」そうメールした。

私たちは久しぶりに三人で飲むことにした。まるで陵と言う存在は、最初からなかつたかのようを感じた。二人とも、必死で気を使つて「陵」と言う単語を出さないようにしてゐに違ひなかつた。おかげで私も気が楽だつた。でも途中で、「今までどうしてた?」つて梨香に聞かれた。私は悩んだけど、「家に引きこもつてただけ。」

そう答えた。私はこれまで、親友つて言つのは絶対的な信頼をおく者で、嘘ついたりとかそういうことはないつて、馬鹿みたいに信じたから、これが梨香たちについた初めての嘘だつた。でも、まもなく氣まずそうな顔で、愁也が「あのさあ…」と、切り出した。私と梨香かは口を揃えて「何よ?」と言つた。すると愁也は柄にも無く、口の中を「モモモモ」とさせながら、話し始めた。

「風の噂で、紗由実が男たちを次々に食い荒らして、ポイしてゐるつ

てオレ聞いて、まさか、陵のことで、そんなんなったのかなって思つて… そうだつたとしたら、陵に告白しろつてけしかけたオレにも、少し責任あるんじやないかって思つて…。でも、梨香も紗由実のことをすこしく心配してたから、相談できなくてさ。しかも、なんか引きこもつてた割には紗由実、しゃべりも雰囲気も違つじやん? もしかして、本当だつたのかなって。」

私が初めて親友についた嘘は「風の噂」によつて、三分も持たずにバレた。

梨香が私を痛いほどに見つめていた。愁也は申し訳なもそうに、下から私を見上げた。

私はとりあえず「ハハツ」とうすら笑いをしてみた。でも、誤魔化せるはずもなくて、二人は私の方を見たままで、私は渋々と話し始めた。この人たちには、この世で一番田に聞かれたくなかったなあつて思いながら。

「本当だよ。私、陵を忘れられて、独りになりたくないくて、でも一人にメールしようと思つたら、陵のことを思い出しちやつて…。昔の飲み友達を飲みに誘つたの。そしたら、ホテルに誘われた。それで、Hした。そしたら、気づいたの…。Hしてる間は何も考える隙が無いから、陵を忘れられるつて。だから、何人かの男と寝た。でも、皆私が陵を思い出すような行動や言動をするし、私彼氏なんでもう要らないのに、告白してくるし…。だから、皆断つた。そしたらそんな噂がたつたんだね。でも、今は皆嫌になっちゃつて、また独りだから、安心して。」

そしたら、梨香が私の肩を驚掴みして「じゃあ、何で今頃になつて、私たちに連絡してきたの? また、独りが嫌だつたから?」 そう哀しそうな目をしつつも、怒りを露わにした。私はまた、その状況を開するように、一拍おいてから微笑をして、言った。

「ううん。私、また気づいたの。それまでは、どんなことをしても陵は私を好きでいてくれるって心のどこかで思っていた。でも、こんな汚い私を陵はもう好きになりっこない。今度こそ諦めるしかない。つてね…。それで、今まで消せなかつたアドレスも、メールも消した。そしたら、急に一人に連絡取りたくなつてね」

すると、ずっと肩を掴んでた梨香の手が離れ、まもなく私は頬にチリチリとする痛みを感じた。何があつたか分からなかつた。でも、ビンタされたのだと数秒経つて気づいた。梨香は泣いていたものの、もう一度腕を上げたところで腕を愁也に押さえつけられた。そして、今度は愁也が言った。「紗由実はどこかで、こういう結果を望んでいたんだろ？自分の気持ちが抑えられないなら、どうにもならない状況を作るしかないと。でも、それは一人にとつて、一番不幸なやりかただよ。この風の噂つて言つのは、実は陵から聞いた話なんだ…。」

私はさつき、二人にこの話をする時に“この世で一番目に聞かれたくなつたなあ”そう思つたが、まさか、この世で一番聞かれたくない相手が、一番最初にこの話を知つていたとは思わなかつた。まだ続きがありそうな愁也の話を遮る様に、私は「何で？？何処から？意味分かんない」そう言つて、取り乱した。今度は私が愁也に押さえつけられた。

「いいか、良く聞け！オレと陵が買い物へ行つた時だつた。陵の後輩だかなんだか良く分からぬ奴が、紗由実の元彼ですよね。そう言つて近づいてきた。“自分は紗由実と付き合つてた。でも、あいつつてホント最低ですよね。紗由実はオレの友達とセフレで、オレと付き合い始めて、二人の関係はやめてもらつた。でも、そいつは紗由実が他にも関係がある奴が何人かいるつて言つてた。だけど、

自分は紗由実を好きだつたから、信じてた。けど、一回だけオレもHしたんだ。そしたら、その後に「バイバイ」って言われて、捨てられた。友達の話は本当だつたんだ。紗由実は誰とでも寝て、すぐにポイだぜ”つてね。陵はその時は何も言わなかつたけど、後からオレに“紗由実はそんな奴ぢゃない”つて言つてた。でも、オレがその話しが嘘ならいいけど、真実ならどうする？ そう言つたら“もう一度、紗由実と話さなきゃ…。俺のせいだ” そう言つてた。でも、真実かどうか確かめられないことには行動できないってさ…オレ、やっぱり陵ともう一回ちゃんと話したほうがいいと思うよ

話が一通り終わつた頃に梨香が「私もそう思つ。殴つて悪かつたけど、紗由実が辛かつたのと同じに陵も辛かつた。そうでしょ？ もし、陵に電話かけるのが怖いなら、愁也も私もついてあげるから」そう言つてくれた。私は色々な意味で泣いた。そして、「本当にありがとう。一人はやっぱり最高の親友だよ。今日はもう帰るね。帰つて、陵ちゃんと電話しなくちゃ。やっぱりこれは一人の問題だから、私の口でちゃんと陵に話すよ。」 そう言つて、急いでお店を出た。帰り際に愁也に「おおい！ 携番は？」 そう聞かれた。私は「頭に入つてるから、大丈夫！」 そう言つて、手を振つた。一人は私を笑つて見送つてくれた。何度も陵に電話かけようと思つて、電話帳を開いたまま画面とにらめつこしてたから、消した後も番号は頭に残つていた。

ドキドキした。

呼び鈴が七つ鳴つたのを覚えている。

「はい。」

そう聞いた、電話越しの久しづりの声に、それだけで涙が出そうになつた。何でこんな簡単なことが出来なくて、あんな馬鹿なことをしたのかと後悔もした。

「紗由実です。お久しぶり…。」

何だか、なんて切り出したら良いのか分からなくて、かしこまつた言い方をしてしまった。

「元気してた?…。つて、そんな訳ないか。噂で聞いたよ。僕のせいだつたら、何て言つて詫びたらいいんだろう…。」

私は、自分ばかり傷ついてると思つていたけど、私をこんなにしたのは自分だつて、きっと陵ちゃんは優しいから、自分を責め続けていたに違いないと思つた。私の中に、初めて罪悪感が生まれた。でも、それと同時に私は自分で思つてはいるよりずっと、陵ちゃんを諦めかけているのかなつて思つた。この時に“じゃあ、責任とつて私と付き合つて”つて、陵ちゃんの優しさに漬け込めば良いと頭に浮かんだのに、そうしなかつたから。

「陵ちゃんは悪くない…。」

言葉に詰まつた…。その間を陵ちゃんは黙つて待つていた。

「私が弱いから、陵ちゃんに依存しすぎたから…。」

陵ちゃんはやつと口を開いた。

「今度は僕から紗由実を振るよ。紗由実一人に全てツライ役をを背負わせたりしない。僕、紗由実と別れてから、恥ずかしい話、睡眠不足と栄養失調で貧血を起こして、会社を何日か休むハメになつて…。それで、母親が心配して一人暮らしの僕の為に、お手伝いさんを頼んだんだ。朝・夕ご飯を作つてくれるよう頼んだ。掃除は自分でするからつて断つたけど。その子はとても優しくて、僕の話を聞いてくれた。そして、泣いてくれた。恋愛感情は無かつたけど、単純に嬉しかつたんだ。それからは、一緒にご飯食べようつて言つて、作つてもらうだけじゃなくて、一緒に食べてもらうことにした。毎日毎日、一人のご飯がどんなに寂しいかつて考えていたからね。そしてある日、その子は香用つて言つんだけど、カヅに告白された。カヅは“陵くんが紗由実ちゃんをまだ好きならそれで構わないし、陵くんが結婚するならそれでも良いから、側にいさせて”つて言つてくれて…でも、僕は紗由実にヒドいことをして、自分だけ幸せに

はなれないって思つたから、断つた。でも、カヅは“気持ちが変わるまで待つ”って言つてくれた。僕、OKするよ！」

そう言つた。私は多少、寂しさを覚えたけれど、心のどこかですつきりした気持ちがした気がした。

そして、悲しみからか、怒りからか、それとも喪失感からなのか、どこの感情から出てきた言葉なのか自分でも分からなかつたけど、なぜか「私カヅちゃんに会つてみたいな。」そう言つた。陵は普通に「いつ会う？」って、聞いてきた。私の意外な答えにビックリしたに違いないと思つたのに。さすが陵だつた。

早速、次の休みに私たちは三人で会つた。お手伝いさんつて言うから、失礼ながら、もうちょっと年増の方かと思ひきや、大学生つてことは、自分と変わらないつてことに気づいた。調理学校に通つてるカヅちゃんは、料理が得意という事で、とりあえず三年間の専門学校を卒業するまでつて、陵のお母さんと契約したそうだ。すごく細くて、白くて、なんだか、失礼な話、本物のお嬢様の梨香よりもお嬢様に思えた。話し口調もどつてもおつとりしてたから、余計なのがもしけない。しかも、会つてまもなくカヅちゃんから私に抱きついてきて、「私よりずっとお姉さんぽいですねえ」。私なんか、全然高校生くらいにしか見られないのに。」つて、話し始めた。てか、それで感動して、抱きついてきたの？？変わり者だと思つたけど、なんか憎めない可愛い人だつた。一緒にランチをした。私は久々に会つた陵が、何も聞かずに普通に接してくれるのが嬉しかつた。そしたら、いきなりカヅちゃんが陵ちゃんもいる目の前で、しかもファミレスの中で「陵くんつて、H求めてこない人ですか？」そう言つた。近くの席の人が振り返つた。私と陵は「ちょっと！」と二部合唱をして、笑つた。そして、ご飯は食べ終えていたので、私が「カヅちゃん次どこ遊びに行くう？」つて、陵がお会計に立つた間に外に連れ出した。幸い、陵ちゃんはお会計で前にカツプルが二組いて、まだ戻りそうに無かつたから、私も興味半分で「陵ちゃんと

は、まだしてないの？」と聞いた。カヅちゃんは「聞いてくださいよお！」つて、また私の肩に飛びついてきた。この子はボディタッチをする癖が激しくあるんだと思つた。「私に手を出してこないんです。この間だつて、目の前でパンチラしてあげたのに、まだキスも…」私は驚いた。そして、「カヅちゃんつて、なんとなくウブそうだし、襲いにくいんじゃない？それに、大事にされてるんだよ！大体、陵ちゃんが本気になつたら、意識飛んじゃうよ！？」つて私は一人で笑つた。カヅちゃんは「そんなあ！！私だつて元彼とHくらい経験ありますよ！でも、意識飛んじゃうつて…ありえない！！」つて、恥ずかしいくらい、叫んだ。でも、マジで膨れた顔が可愛かつた。でも、気がづくと、一体いつから話を聞いていたのか、後ろに陵が立つて、「一人で何の楽しい話しているのかなあ？？何か、卑猥な話を公道で堂々としていいのかな？」つて言つて、私と私の腕にマスクottみたいにくつついたカヅちゃんの頭をポンつて叩いた。三人で、笑つた。こんな日が来るとは思わなかつた。正直、二人に会うまでは、会つたらまた陵ちゃんのこと忘れられなくなつちやうんじやないかと思つてたけど、私はこの時カヅちゃんと陵が幸せになればなあ・・つて思つた。

大体、私が言えなかつた“結婚しても良いから、側にいて”その言葉を平気に言い捨てたカヅちゃんに、私は会つ前から敗北してたから。

それから、私とカヅちゃんと陵ちゃんは普通にメールしたり、たまに会う仲になつた。

カヅちゃんから、初Hの報告受けたときには、愁也と梨香にも教えてあげて、皆で笑つた。カヅちゃんはその憎めない人柄が幸いしてか、いつの間にか梨香や愁也の心もゲットして、愁也の話によると、梨香がカヅちゃんに「陵と別れたら、私と付き合いなあ！いいこといっぱいしよう。」つておっさん臭いプロポーズして、陵に怒られたとか、愁也も愁也でカヅちゃんのボディタッチがお気に入り

で、肩に頻繁に抱きついてくるカヅちゃんに、フニフニして可愛いくて言つて、抱きつき返してふざけて、梨香に蹴られたとか、色々聞いた。

そして、数ヶ月が経ち、梨香と愁也が正式に婚姻届を出して来た話を聞いた。二人は仮面夫婦となつて、同姓を始める事になつたらしいけど、お互いの親の干渉が煩いって言つると、早く子供作れつていう文句が頭にきたらしく、隣県に土地を買って、一戸建てを建てることにした。会社までは交通の便がいいから、電車を乗り継がないで行けるって言つてたし、親もそんなに暇じゃないから、あまり来なくなるだろうと。それで、二人は家が建つまで、その近くのマンションを借りることにしたらしく、引っ越しことになつた。これからは、お互いの親が社長を退くまでに、色々と準備をしなきゃいけないし、ただですら私たちの溜まり場からは一番遠い一人だつたから、それ以上遠いところへ引っ越ししたら、会えなくなるって言つて、最後に仲の良い人だけ集まって、二人の偽装結婚と引っ越し祝いをかねて、パーティーをした。梨香が、左手の薬指を私たちに見せて「結婚しましたあ」ってふざけて言つた後、「僕たち一度もHをしてない、枯れた老夫婦のような生活です。」って、愁也が笑いを誘つた。いくら男と女の関係にならないって言つても、幼馴染であり親友の二人は、そこら辺の夫婦以上の絆があると思つた。私とカヅちゃんは、大号泣した。カヅちゃんはお得意の抱きつき攻撃を一人ひとりにしながら「さよならあ。」つてしていく、私も「今までたくさんお世話になつたのに、何の恩返しも出来ずにゴメン。でも、二人はこれからも私の親友だよ。ありがとう。」つて、カヅちゃんの真似して抱きついた。それからまもなく、二人は引っ越ししていく、会つことはなくなつてしまつたけど、たまにメールすると元気そうなのが分かる。新しい家に梨香は彼女を連れ込んでるらしくて、独り身の愁也に絶えず小言を言われ続けてるつて言つてた。なんか、想像できちやうところがすごいけど…。

それからなんとなく、皆で集まるつてことは少なくなった。ムードメーカー一人を失った今、イマイチ盛り上がりに欠けるところがあるような気がするのは、私だけじゃないみたいだつた。

それからしばらく経ち、今度は陵がカヅちゃんと別れたつてメールしてきた。まもなく、カヅちゃんからも長い長いメールが届いた。二人のメールを読むところによると、やはり原因は、陵だ。つて言つても、陵本人が直接的な理由つて訳ではないんだけど、二人がデートしているのをたまたま陵のお父さんの乗つた車に発見されて、お父さんが怒つて「一人がこれ以上付き合つているようなら、相手の女の子を解雇にする。別れるなら、その子には我が家の方で働いてもらうことにしよう。」そういつたらしい。陵はもちろん反論して「それならば婚約を解消する」つて言つたらしいけど、やつぱり私の時と同じで、それは陵の為にならないと、カヅは「陵の為になら、学校辞めるからそんな事言わないで。」つて言つた。でも、カヅは母子家庭で、自分の学費はお手伝いをしてる給料から払つていた。それを、もちろん陵も知つてゐるわけだから、今度は陵が、それはカヅの為にならないと振つたらしいのだ。

何だか複雑なことになつた。

むしろ、二人の相談相手が私つて言つのが何より間違いではないか？とも思つた。

陵は望まない結婚を前にブルーな感じで、しばらくくらしくないと言つてたけど、カヅちゃんは意外と強いタイプみたいで、少し経つてから「やつぱり、無理だつたんです。その時はすごく好きだつたけど、冷静になると、愛人なんて続くわけがない。早くに気が付いて良かつたんです。」と言つた。

でも、ここで私はまた新たな自分に気づいた。私つてやつぱり陵の

こと好きなのかもと。ショッピングモールの陵をなんとか励ましてやりたいと思うし、別れてからもずっと冷静でなんなかつたんじゃないかなと…。ちゃんと気持ちの整理がついていれば、今のカヅちゃんのようになり、陵に夢中になつていた頃を“あの頃は…”って過去に思えるはずだ。でも、私は違う。気づくと陵は今何してるかな?って考えてしまう。ただ、今までにはカヅちゃんつていう、彼女の存在が在つたから、無理に気持ちを押し殺していただけなのかと。そう思つたら、居ても立つてもいられなくなつた。

陵に「相談乗つたげるから、会おう。」そう言つた。私はズルイ女なのかも知れない。こんな状況の陵に漬け込もうとしているのかもしない。そう思つたら胸が痛かつたが、私はそんな事を考えていると、また前の一の舞になつてしまつた。顔を上げて歩き出した。

陵の家へ行つた。私のことを信用しきつていてる陵は、私に色々話してくれた。私は思いつきり涙していた。陵も泣いていた。これは私が見る、一度目の涙だつた。陵は優しい。前は私の為に泣いてくれて、今度はカヅちゃんの為に泣いている。結局、私はズルイ女にはなれなかつた。泣いている陵を押し倒して、しまうことくらい簡単だつたし、それが出来なくて、優しい言葉で陵を落とすことは、今なら簡単だつただろうと思う。でも、そう考え付いたのは家に帰つてからで、実際は力なく座つて泣いている陵の頭を、黙つて抱きしめてあげていただけだつた。そう、いつも陵が私にしていてくれたように…。

何かの本で、人間はお母さんのお腹の中で、お母さんの心音を聴いて育つから、心音を聞かせると、とても落ち着くのだと読んだのを思い出した。だから、私はいつも陵の胸に埋もれて、安心しきつて眠つていたのか。なんて、ふと思い出しながら、私はしばらく陵

の頭を抱いたまま、お膝立ちしていた。ふと、足がしごれたことに気づいて一まず離れてみると、陵はもう泣き止んでた。私はもう平気かな？と思つて普通に陵に「いつから泣き止んでたの？私、足がしごれちゃつたよ。ひょつとして、私の巨乳に顔をうずめて喜んでたんじやないでしょうね？」なんて、意地悪っぽく言つてみた。そしたら、そこに居たのは私の知つている陵ちゃんで、「まあね！」つて笑つてたから、私は頭をポンつて叩いた。陵ちゃんは後から「でも、すごい落ち着いた氣がする。ありがとう！」そう言つた。ああ、私はこの笑みに弱いんだから、辞めてよねつて思つた。でも、心音の話は本当みたいだつた。少しばは讀書してて良かつたと初めて思つた。

それ以来、本当にカヅちゃんのことは吹つ切れたみたいで、話題に上がらなくなつた。

私たちはその頃、よく電話をするようになつた。そしてある日、いよいよ陵に「結婚」という言葉が重くのしかかつてきただみたいで、その時も初めて相手の女性と対面してきた日だつた。すぐ陵を気に入つてくれてるみたいつて話だつたけど、陵はため息ばかりついていた。私が「綺麗だつた？」つて聞いても答えは「まあ。」の一言だつた。でも、さすがは陵だつた。意外と計画的で、結婚すると、お互の親が建ててくれた新居に引っ越すようで、今のマンションはお父さんが借りてくれるから、手放すことになるんだけど、大家さんに話をつけて、今住んでいる部屋だけ陵本人が借りることにして、憩いの場にする予定らしい。

それからしばらく陵は、色々と忙しかつたみたいで電話もメールもしなかつたけど、代わりに久しぶりに愁也から電話が来て「陵の結婚式の招待状が来て、俺と後何人かの大学の友達で友人代表挨拶と、歌を一曲任されてるんだ。もちろん、オレは歌のほうなんだけど、紗由実が選曲してくれないか？」そういう内容だつた。きっと、

結婚式には呼ばれることにない私へ、せめてもの陵へのメッセージを伝えさせてくれようとしてるに違いないと思い、「一日待つて！」そう言つて、電話を切つた。最初に浮かんだのは陵と別れた日に最後に陵が歌つた曲だけ、それはちょっとバラードだから、結婚式には相応しくない気がしたから、その歌手の出している他の曲から、もっとアップテンポなものを選ぶことにした。歌詞カードをめくつてたら、ちょうど、胸を擊つ歌詞を見つけた。即決でこれに決めて、スグに愁也にメールした。私はその曲をリピートモードにして、しばらく聞き続けた。

懐かしい夢を見た

あの頃は寄り添うように

あふれる孤独を皆で分かち合つて・

大切なものが何かと

気づいたときには遅すぎて

過ぎ去つた思い出はいつも眩しそぎて・

(中略)

キミが叶えたい夢なら

うつむいて泣いたりしないで・

(中略)

君の笑顔を見せておくれ

誰より素敵な僕のその笑顔を・

数え切れない夢を語り合つたあの頃には

もう、戻ることはないけれど・

とても切ない曲だつた。でも、曲調はアップテンポだし、だいたい、結婚式でそんなに真面目に歌を聞いてるのなんて、本人たちだけで、後は皆飲み食いに忙しいから、そんなに歌詞に気を使わなくとも平気だらうと思つた。

まもなく、愁也からメールが来て、絶対紗由実が選んだってバレるぞって笑つてた。

それから数日後、友達同士で集まつてカラオケで練習したらしく、声だけ撮つたムービーメールが届いた。私の選んだ曲を歌つてた。微妙に音痴な人が紛れているのが気になつたけど、上手だった。三十秒にも満たないムービーを、何回も何回も再生した。自然と涙が出てきた。

『気分が暗くなつちやうからつて、わざと結婚式の日取りは聞かないことにした。でも、ある夜に陵本人から電話があつて、明後日が結婚式だつて聞いた。しかも、まだ結婚の覚悟が出来てないとか…。陵らしくなかつた。私は怒つた。初めて陵を相手に怒りの感情が芽生えた。『馬鹿じやないの!! 何のために、私やカヅちゃんのこと悩んだか考えな! やるより先に「ゴタゴタ言わない!』じや、メールする。』 そう言つて、電話を切つた。

そして、私は泣きながらメールを打つた。

『さつきはゴメン! 紗由実、今日は珍しく真面目なメールだから、感動して泣くなよつ (笑)

『私ね、こんな時じやなきや言う機会ないから、言つちやいますけど、別れてからもずっとずっと大好きだつたよ。私から離れようつて言つたけど、やつぱりキッパリとは切れなくて、手を伸ばせば届くような、身近な距離を保ち、引きずつっていたよね。

『私ね。陵ちゃんがカヅちゃんと付き合い始めたときも、素直に良かつたつて思つた。でも、いつも『陵ちゃん何してるかなあ』とか考えたし、落ち込んだ時とか『陵ちゃんならこんな時、何て言つて励ましてくれるかな』なんて、都合よく考えてたよ。

でも、もうこれからはそんな事考えないよ。たとえ陵ちゃん本人が望んでなかつたとしても、陵ちゃんは、相手の人と永久の誓いをし

てしまふんだもの。

陵ちゃんさあ、私が別れるつて言つた時に「自分には紗由実を幸せに出来る資格はない」そう言つたくせに、私の手を強く握つてきたでしょ？…あの時のあの手を離さずに「ずっと一緒にいる」そう言つてたら何か今とは違う結果にかつてたのかとか、色々後悔したまま、結局は言えなかつた私が、今も、あの時の、あの場所に居るんだよ。

でも、陵ちゃんは恵まれた生活を両親から『えられて、それと引き換えに自分の幸せを両親に返すんだよ。例えそれが陵にとつて辛いことでも、苦痛そのものだとしても、私には止められないから…。止めてあげられたら。そう考えた時もあるけど、陵の恵まれた環境、愛しい家族、大切に思つてゐる会社、部下・・全てを奪つてまで幸せになる自信は、私にはなかつた。

でもね、こんな時に不謹慎だけど、嬉しかつた。陵が『いつやつて相談してくれたのが、他の誰でもなくて、私だつたこと。

私は陵を好きでよかつた。

・・・・・これが、私の答えです。私は陵のツライ気持ち、少しは分かつてゐつもり。いつも近くに居たんだから。だから、容易く「頑張つて」とは言えない。でも、「だから辞めろ」とも思わないよ。何のためにこれまで悩んできたか、考えて、答えを出したらいいと思ひます。

私はもう何も言ひません。

追伸

体に氣をつけて頑張つてね！

会社の益々の繁栄を心より願つてます。』

送信ボタンを押して、その後は声を上げて泣いた。今度の今度こそ終わりだって、自分に言い聞かせた。それでも、すぐには忘れられないものだったけど。

それから一年が経った。

陵からは、たまにメールがくる。憩いの場に借りたマンションが住処になりつつも、ちゃんと定期的に家に帰るようにしているみたいだ。子供を双方の親から望まれてるが、めつきりやる気が起きなくて、このままでは人工授精だって、言つてた。あんなに絶倫だったのに…と思わないでもないけど、気にしてるだろうから言わないようしている。でも仕事では、めでたく専務に昇進し、うまくいつてるみたいだから、私は別に陵の夫婦仲がどうだろうと口を挟むようなことはしない。

私自信はあてもなくフリーターをしている。将来の夢も何もない。恋愛に関しては、何人かいいなあと思った男性が居たけど、陵を好きになつた時のように、心に沸き立つ様な波が起こらなくて、好きって言つまでには感情が追いつかなかつた。

私はもう、一生分の恋は燃え尽きてしまつたのだと考へる。

恋は愛を産んだ

愛は罪を産んだ

でも

罪は孤独しか産まない

罪は未来を産めない

愛は罪に何も教えられなかつた

そして

誕生の理由も分からないま

罪は愛と恨み親を拒んだ

恋と言つ祖母を恨んだ

いま

クライクライ闇ノナカ

タクサンノ孤独ラウンデイル

星モ月モ見エナイ。

恋 × 罪 fin . .

(後書き)

誤字脱字あります。  
「メンなさい（：・：）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4383c/>

---

恋×罪

2010年12月30日21時55分発行